

木曾左馬頭、その日の装束には、赤地の錦の直垂に

(さまのかみ) (にしき)(ひたたれ) (からあややどし) (くわがた) 継続「たり」体

唐綾威の鎧を着て、鍬形打つたる甲の緒締め、いかもの

上二・用 四段・用・促音便 下二・用

づくりの大太刀はき、石打ちの矢の、その日のいくさに

四段・用 格助・同格

射て少々残つたるを、頭高に負ひなし、滋藤の弓持つ

上二・用 四段・用・促音便 四段・用・促音便

て、聞こゆる木曾の鬼葦毛といふ馬の、きはめて太う

下二・体 格助・同格

たくましいに、金覆輪の鞍置いてぞ乗つたりける。

形・ク活用・用(イ音便) 四段・用・イ音便 係助 継続「たり」用

鐙ふんばり立ち上がり、大音声をあげて名のりけるは、

(あぶみ) 過去推量「けむ」体 (だいおんじょう) 過去「けり」体

「昔は聞きけんものを、木曾の冠者、今は見るらん、

過去推量「けむ」体 (かんじゃ) 現在推量「らむ」終

左馬頭兼伊予守、朝日の將軍源義仲ぞや。甲斐の一条

(さよのかみ) 係助 間助

次郎とこそ聞け。互ひによいかたきぞ。義仲討つて、

係助 四段・已 形・ク活用・体(イ音便) 四段・用・促音便

兵衛佐に見せよや。」とて、をめいて駆く。一条次郎、

(ひよこえのすけ) 四段・用・イ音便 下二・終

「ただ今名のは大將軍ぞ。あますな者ども、もらすな

四段・体 係助 四段・終 終助

若党、討てや。」とて、大勢の中に取りこめて、我討つ

四段・命 間助 下二・用 四段・未

取らんとぞ進みける。木曾二百余騎、六千余騎が中を

意思「む」終 過去「けり」体 格助・連体修飾格

縦様・横様・蜘蛛手・十文字に駆け割つて、後ろへつつ

(たてさま) (くもて) (じふもんじ) 完了「たり」已

と出でたれば、五十騎ばかりになりにけり。そこを破つ

下二・用 四段・用 四段・用・促音便

て行くほどに、土肥次郎実平二千余騎でささへたり。

四段・体 完了「たり」終 下二・用

それをも破つて行くほどに、あそこでは四、五百騎、こ

四段・用・促音便 四段・体

こでは二、三百騎、百四、五十騎、百騎ばかりが中を駆

格助・連体修飾格 完了「ぬ」用

け割り駆け割り行くほどに、主従五騎にぞなりにける。

四段・用 四段・用 四段・体 係助 過去「けり」体

木曾左馬頭は、その日のいでたちとしては、赤地の錦の直垂の上に

唐綾威の鎧を着て、鍬形を打ちつけた甲の緒を締め、

いかめしい造りの大太刀を腰につけ、石打ちの矢で、その日の戦いで

射て少し残っている矢を、頭の上に突き出るほど高く背負って、滋藤の弓を持って、

名高い木曾の鬼葦毛という馬で、たいそう太くて

たくましい馬に、金覆輪の鞍を置いて乗っていた。

鐙に足を踏ん張って立ち上がり、大声を上げて名のり

のつたことには、

「昔から聞いていたことだろう、木曾の冠者を。今は目の前で見ているだろう。」

左馬頭兼伊予守、朝日の將軍源義仲である。

(お前は)甲斐の一条次郎と聞く。

互いに良い相手だ。義仲を討ちとつて、

兵衛佐(頼朝)に見せよ。」と言って、大声を上げて馬を走らせる。一条次郎は、

「ただ今名のは大將軍であるぞ。討ちもらすな者ども、

取り逃がすな若党、討ち取れよ。」と言って、大勢の中に取り囲んで、

我こそが討ち取ろうと進んだ。木曾の軍勢二百余騎は、敵の六千余騎の中を

縦に、横に、八方に、縦横に駆けまわって破り、後ろへつつと

抜け出ると、五十騎ほどになってしまった。

そこを破つて

行くうちに、土肥次郎実平が二千余騎で待ち受けていた。

それをも破つて行くうちに、あちらでは四、五百騎(の敵)、

こちらでは二、三百騎、また、百四、五十騎、

百騎ほどの中を駆け破り、駆け破りして行く

うちに主従五騎になってしまった。